

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520658

研究課題名(和文)第二言語によるオーラルコミュニケーション遂行時の心理的ストレスとその対処方略

研究課題名(英文) Psychological Stress in Second-Language Oral Communication and Coping Strategies against It

研究代表者

野呂 徳治 (Noro, Tokuji)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：90344580

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第二言語としての英語によるオーラルコミュニケーション遂行時の心理的ストレスの影響及びそのメカニズム並びにその対処方略の発達プロセスの解明を目指したものである。研究結果から、学習者が経験する心理的ストレスは、語彙や表現内容の想起の障害、発話の流ちょうさ、正確さ、複雑さの低下、そして、発話イニシアティブの喪失を引き起こしていることが示唆された。ストレス規定要因としては、言語面での困難の他に、課題遂行への自己要求水準の高さと自意識の強さ、さらに、コミュニケーション場面での疎外感があげられた。対処方略としては、言語的方略に加え、自己モニターの活性化による自制心の漸進的回復が特に顕著であった。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to explicate the effects and mechanism of psychological stress in second-language (L2) oral communication as well as the developmental processes of coping strategies against it. The research results showed that the stress experienced by L2 learners debilitates recollection of vocabulary and message intended to express, lowering the fluency, accuracy, and complexity of their utterances and eventually leading them to lose initiative in communication scenes. Examination of the mechanism of L2 communication stress revealed that, in addition to language difficulties, too high aspiration levels and too much self-consciousness as well as a sense of alienation are among major contributing factors. As for coping with L2 communication stress, gradual regaining of self-control through activation of self-monitoring was the most frequently observed strategies other than linguistic ones.

研究分野：英語教育学

 キーワード：コミュニケーション不安 心理的ストレス ストレス対処方略 オーラルコミュニケーション 英語  
第二言語習得

### 1. 研究開始当初の背景

第二言語(外国語)学習に関わる情意的要因の一つである「外国語学習不安(Language learning anxiety)」は、従来、ある状況下で一時的に生起する不安を意味する「状態不安(trait anxiety)」の中でも、ある特定の場面でのみその生起が観察される「特定場面不安(situation-specific anxiety)」としてとらえられてきた(e.g., MacIntyre, 1999)。しかし、このとらえ方では、主に不安の予測や予防にその重点が置かれているため、現在進行中の第二言語(外国語)による言語使用場面における認知的側面と情意的側面の関わりをダイナミックにとらえることが難しく、特に、不安が言語使用、ひいては言語学習全般に与えていると考えられる阻害効果(debilitating effects)の実態とその生起のメカニズムについてはほとんど研究されていなかった。

筆者は、本研究の構想時において、従来の特定場面不安としての外国語学習不安の枠組みではなく、Lazarus and Folkman (1984)らによる心理的ストレス理論にその理論的基盤を求め、主に、第二言語(外国語)としての英語のリスニングにおける情意的側面と認知的側面の関わりを解明を試みていた。筆者は、英語のリスニング困難場面において聞き手が経験する精神的な緊張や不安、あるいは焦燥感、欲求不満、パニック、さらには失望感などを含めたストレスフルな心的状態を包括的に「リスニングストレス(listening stress)」と名付け、心理的実在性のある独立した一つの構成概念としての妥当性の検証を行うと共に、その生起のメカニズム並びに阻害効果の解明、さらには、その対処方略の発達プロセスについても調査・実験を通して明らかにした(e.g., Noro, 2006, 2010, 2011)。

筆者による上記の研究では、その対象をリスニングプロセスのみに限定していたが、「リスニングストレス」の実態を明らかにするためには、その対象をリスニングプロセスのみに限定することなく、スピーキングプロセスとの相互作用、相互規定としてのオーラルコミュニケーションの情意と認知の関わりをダイナミックにとらえる必要があるということが判明した。そして、それは、「リスニングストレス」のみならず、第二言語(外国語)による言語使用並びに言語学習全般における心理的ストレスの影響の全体像を明らかにすることにもつながると期待されるものであった。

### 2. 研究の目的

本研究は、第二言語(外国語)としての英語によるオーラルコミュニケーション遂行時における情意的側面と認知的側面の相互作用が学習者の言語使用に与える影響とそのメカニズムの解明を主なテーマとし、以下に掲げる項目を具体的研究目的とした。

- (1) オーラルコミュニケーション遂行時に学習者が経験する困難から生起する心理的ストレスの「コミュニケーションストレス」としての概念構成とその生起のメカニズムの解明
- (2) 「コミュニケーションストレス」のコミュニケーション遂行に対する阻害効果の実態の解明
- (3) 「コミュニケーションストレス」対処方略の援用・発達プロセスの解明と規定要因の特定

### 3. 研究の方法

- (1) 「コミュニケーションストレス」の概念構成のための質問紙の作成並びに質問紙調査及び面接調査の実施

本研究で提案した「コミュニケーションストレス」の構成要素並びに先行条件及び規定要因の洗い出しのために、標準化された心理的ストレス評定尺度を参照して、第二言語(外国語)によるオーラルコミュニケーション遂行時に学習者が経験すると思われる心理的ストレスを調査するための質問項目を作成し、日本人英語学習者(大学生を対象に質問紙調査及び面接調査を実施し、その結果をもとに概念構成に取り組んだ。

- (2) 「コミュニケーションストレス」のメカニズムの解明のためのインタビューテストの実施

「コミュニケーションストレス」の生起の様相を明らかにするためのデータ収集のために日本人英語学習者(大学生)を対象にインタビューテストを実施し、特に強いストレスを経験していると判断される被験者については、インタビューテスト場面の録音音声を聞きながら自分自身のコミュニケーション遂行状況を想起する刺激再生法により自身のストレス経験を内省し、それを口頭で報告してもらうという遡及的発話思考法により得られた質的データのプロトコル分析を通して、「コミュニケーションストレス」の生起のメカニズムの解明に取り組んだ。

- (3) 「コミュニケーションストレス」の阻害効果の解明のためのインタビューテスト並びに会話分析の実施

日本人英語学習者(大学生)を対象とした上述のインタビューテストに加え、海外研究協力者の協力のもと、英語圏(米国)における短期語学研修に参加した日本人大学生を対象に、母語話者との日常会話を録音してもらい、その録音音声を基に会話分析により被験者の発話並びに会話におけるイニシアティブレベルを分析すると共に、刺激再生法及び遡及的発話思考法により得られた被験者のコミュニケーション遂行中の心理的ストレスの経験に関するデータのプロトコル分

析を行い、心理的ストレスの阻害効果の解明に取り組んだ。

(4) 「コミュニケーションストレス」の対処方略の援用・発達プロセスの解明のための質問紙及び面接調査の実施

海外研究協力者の協力のもと、英語圏（英国）に長期留学している日本人英語学習者（大学生）を対象に質問紙調査及び面接調査を実施し、その結果を基に英語でのコミュニケーション場面で経験する心理的ストレスに対してどのような対処をしているかについて、方略の援用及び発達のプロセスの解明に取り組んだ。

4. 研究成果

(1) 「コミュニケーションストレス」の概念構成及びそのメカニズムの解明

質問紙調査及び面接調査の結果、第二言語（外国語）としての英語によるオーラルコミュニケーション場面において、対話者の発言内容を理解することができなかつたり、伝えたい内容が十分に表現できないようなコミュニケーション不全がある一定期間持続した場合、不安の高まりと共にコミュニケーション場面での自己存在意義の喪失感に伴う疎外感により心理的ストレスが生じ、それは、当事者の言語使用に阻害的影響を与え、さらなるコミュニケーション不全、そして、ストレスを引き起こすという循環的特性を持つものであることが明らかにされた。

また、心理的ストレス誘発実験として行ったインタビューテストに基づく刺激再生法によるプロトコル分析の結果、「コミュニケーションストレス」の規定要因としては、課題遂行への自己要求水準の高さと自意識の強さなどの学習者要因が関わっていることが明らかになった。

(2) 「コミュニケーションストレス」の阻害効果の解明

「コミュニケーションストレス」の阻害効果について、上述のインタビューテストに基づく刺激再生法及び遡及的思考発話法のプロトコル分析を行った結果、「コミュニケーションストレス」の言語使用に対する阻害効果として、発話のために準備していた単語や表現が想起できなかつたり、話そうと思っていた内容を忘れるといったワーキングメモリへの影響が顕著であった。また、ストレスの高まりと共に談話構造の計画に柔軟性を欠き、想起できない言語形式をいつまでも追い求めることで、結果的に発話が阻害されていることが観察された。

図1、図2は、インタビューテストでの心理的ストレスの阻害効果について、被験者の発話データを基に、その複雑さ、正確さ、流暢さを観点とし、それぞれの指標として、誤りのないT-unit（独立節＋従属節）の平均語

数、誤りのないT-unitの比率、1分あたりの語数（WPM）を算出し、学習者が経験するストレスとの関連についての分析結果を示したものである。

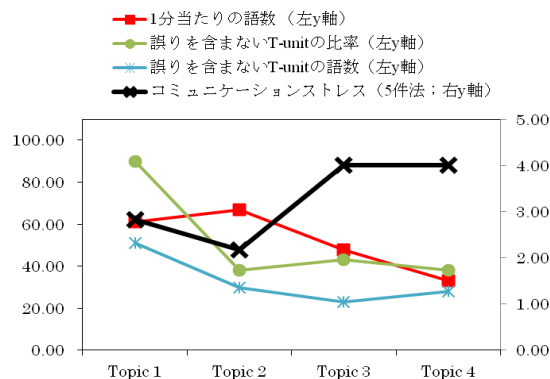


図1 ストレスの発話への影響（高ストレス被験者）

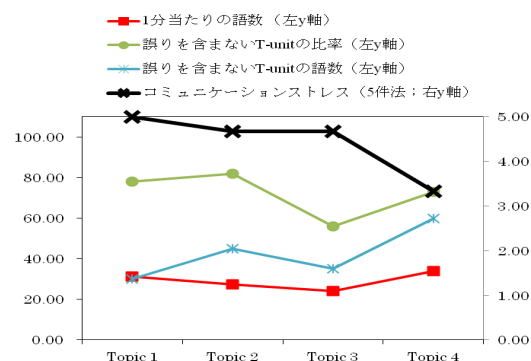


図2 ストレスの発話への影響（低ストレス被験者）

図1は、インタビュー前半ではあまりストレスを経験していなかったが、後半になって強いストレスを経験した被験者のものであり、図2は、インタビュー開始時からずっと強いストレスを経験していたが、最後の話題になってストレスが弱まった被験者のものである。図から明らかなように、ストレスが高まるにつれて、発話の複雑さ、正確さ、流ちょうさが低下していることが示唆された。また、談話の構成面でも論理性、結束性を欠くと共に、内容面でも繰り返しが多く、表面的となる傾向が見られた。さらに、この仮説の一般化を図るために、被験者数を増やして同じデザインでコミュニケーションストレス誘発実験の追試を実施し、結果を分析したところ、仮説を支持する結果が得られた。

さらに、自然発生会話場面における心理的ストレスの影響を明らかにするために、被験者が録音した会話音声を基に、その会話場面で被験者が経験した心理的ストレスとその影響を刺激再生法により分析した。分析にあたっては、当該会話場面で被験者が経験した心理的ストレスに加え、積極的にコミュニケーションを測ろうとする意欲（Willingness

to Communicate; WTC), 対話者の発言内容の理解度, コミュニケーション場面での自己存在意義の認識としての自己効力感の評定も併せて求めた。また, 上述した WTC が被験者のコミュニケーション遂行に具体的にどのように現れているかを見るために, 会話場面における発話のイニシアティブ (initiative) の強さを測るための会話分析の手法の一つであるイニシアティブ-レスポンス分析 (initiative-response analysis; IR analysis) を実施した。

図 3, 図 4 は, コミュニケーションストレスと WTC の変動が顕著な会話場面における, 両者の相互作用による影響の分析結果を示したものである。

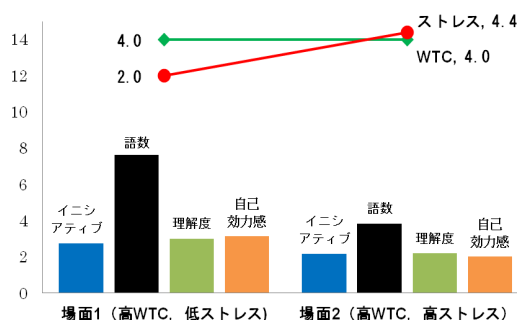


図 3 ストレスと WTC の相互作用による発話への影響 (被験者 A)

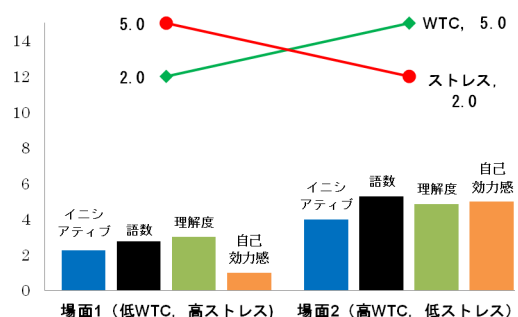


図 4 ストレスと WTC の相互作用による発話への影響 (被験者 B)

図 3 は, WTC の変動がなく, ストレスの変動のみが見られた被験者 A のものであり, ストレスの高まりと共に発話語数の著しい低下が見られている。一方, 図 4 は, WTC とストレスが交互作用を示した被験者 B のものである。この図から, ストレスの低下と WTC の高まりに伴い, 発話のイニシアティブ, 表現力 (語数), 理解度が向上し, その結果, 当該会話場面での自己効力感の向上につながっていることを見て取ることができる。これは, オーラルコミュニケーション場面では, 心理的ストレスと WTC の相互作用による影響の可能性を示唆するものと解釈できる。

これらの結果については, 国際応用言語学会, 第二言語習得動機づけダイナミクス国際

学会を始めとする国内外の応用言語学会において研究発表を行い, 参加者から本研究の妥当性, 有用性についての支持を得ることができた。

### (3) 「コミュニケーションストレス」の対処方略の援用・発達プロセスの解明

ストレスの対処方略の援用プロセスについては, まず, 言語的方略により, 「コミュニケーションストレス」の直接的原因となるコミュニケーション不全の回避, あるいはそこから回復が最も頻繁に援用されていることが判明した。また, 自身の言語使用を自己モニターし, コミュニケーション場面の客観的な分析・評価を基に徐々に自制心を回復し, ストレスの影響を最小限に抑える, あるいは漸次取り除いていくという方略も多くその援用が見られた。

対処方略の発達プロセスについては, 会話場面での困難が多少あっても, そのコミュニケーション遂行に何らかの意義を見出し, 自己効力感を感じることができるとは, ストレスを感じながらも, WTC も高く維持され, その結果, ストレスの阻害効果の低減が観察された。このことは, 対処方略の発達と WTC の発達の相互作用が示唆するものとして, 今後のさらなる研究が待たれるところである。

### <引用文献>

Lazarus, R. S., & Folkman, S., *Stress, Appraisal, and Coping*, 1984

MacIntyre, P. D., *Language Anxiety: A Review of the Research for Language Teachers*. In D.J. Young (Ed.), *Affect in Foreign Language and Second Language Learning: A Practical Guide to Creating a Low-Anxiety Classroom Atmosphere*, 1999, 24-45

Noro, T., *Developing a Construct Model of "Listening Stress": A qualitative Study of the Affective Domain of the Listening Process*. 全国英語教育学会研究紀要 ARELE, 17 巻, 2006, 61-70

Noro, T., *Debilitating Effects of "Listening Stress": Focusing on the Use of Coping Strategies*, 全国英語教育学会研究紀要 ARELE, 21 巻, 2010, 201-210

Noro, T., *Development of Coping Processes against "Listening Stress"*. 弘前大学教育学部研究紀要, 105 巻, 2011, 125-132

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

野呂徳治, リスニング不安とその対処の指導, 全国英語教育学会第 40 回研究大会記念特別誌「英語教育学の今 - 理論と実践の統合 - 」, 査読有り, 1 巻, 2014, 51-55

Tokuji NORO , Real-Time Debilitating Effects of Speaking Anxiety , 全国英語教育学会紀要 ARELE , 査読有り , 24 巻 , 2013 , 251-261

〔学会発表〕(計7件)

Tokuji NORO , The Interactive Effects of WTC and Anxiety on L2 Oral Performance , The International Conference on Motivational Dynamics and Second Language Acquisition , 2014 年 8 月 29 日 , ノッティンガム (イギリス)

野呂徳治 , 英語スピーキングにおける WTC と不安の相互作用による影響 , 第 40 回全国英語教育学会徳島研究大会 2014 年 8 月 9 日 , 徳島大学常三島キャンパス(徳島県・徳島市)

Tokuji NORO , Real-Time Effects of Foreign Language Anxiety , The University of Reading L1 and L2 Skills & Processing Group Lunchtime Seminar (招待講演) , 2013 年 12 月 4 日 , レディング (イギリス)

Tokuji NORO , Examination of the Real-Time Debilitating Effects of Second Language Speaking Anxiety , 2013 AAAL (American Association for Applied Linguistics) Annual Conference , 2013 年 3 月 16 日 , ダラス (アメリカ)

野呂徳治 , 英語スピーキング不安の阻害効果の分析 , 第 38 回全国英語教育学会愛知研究大会 , 2012 年 8 月 4 日 , 愛知学院大学日進キャンパス (愛知県・日進市)

野呂徳治 , 外国語学習とストレス - リスニング不安を中心に - , 第 4 回北東北・第 2 回北海道フィールドワーク社会心理学研究会合同研究会(招待講演) , 2011 年 10 月 8 日 , アソベの森いわき荘 (青森県・弘前市)

野呂徳治 , 「リスニングストレス」の対処方略の発達 , 第 11 回日本第二言語習得学会年次大会 , 2011 年 6 月 11 日 , 文教大学越谷キャンパス (埼玉県・越谷市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

取得状況 (計0件)

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

野呂 徳治 (NORO TOKUJI)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号 : 9 0 3 4 4 5 8 0